

(指定討論)

荒木 現在、高機能自閉症、アスペルガー症候群の子どもたちに取り組みされている方々から報告をいただき、子どもたちを取り巻く教育の現状、研究実践の現状報告をしていただきました。それを受けて日頃、教育現場や療育の現場で努力していただいている3人の先生方からコメントをいただきたいと思います。青山先生から。

青山 教師としてとらえておきたい点を内山先生と望月先生のお話から引用してお話させていただきます。今日のシンポジウム、教師としては肩身の狭い感じを痛感したところです。内山先生が言われた「教える側はどう柔軟性を確保するか」。教師の「万能感」と言われましたが、うまくいっている時は、我々、万能感到近いものを持ちます。うまくいかない時に万能感をどう了承するか。無力感や割り切りという形になっていくことは少なくと思います。望月先生が「脱力」と言われましたが、教師は決して万能ではないけれども、どれだけ大変な時でも、何もできないわけではない。こここのところが一つ大きなポイントだと思います。保護者の手記で紹介しましたように、不適切な行動をそのまま続けない、割り切って投げ出さないでほしいと。これに尽きるかと思います。うまくいっている時と、うまくいかない時の落差が我々教師は大きい。教師は真面目なんです。うまくいっている時は子どもをちゃんとさせたいと当然、思います。うまくいなくなったら、できないと思ったり、迎合したりする。うまくいっている時は集団の中できちっとやれるけれども、うまくいかない時は一対一指導とか別の場がないとできないと錯覚してしまう。

内山先生がワークシステムで言われたことについて賛成しつつ、半分？もあります。3人の子どもがいた時に、ワークシステムは大切で有効だと思いますが、教師の力量論で考えてはだめですが、ある別の視点で動いた時、必ずしも3人がばらばらで一つの課題ができないと決まっているわけではない。ワークシステムを、子どもがわかりやすいということを使いたい、それは決して子どもに言うことを聞かせるための手段でもなければ、集団になったら、そういう子どもに教師は何もできないのではなく、子どもがわかりやすいということにポイントを持ってくるというところに意味があると思います。

教師は万能でもなければ、何もできないわけではないというところを、もう一回振り返ってみたいと思います。ABA(応用行動分析)のところで、個体と環境ということとはもう一回見たいところです。うまくいっていない時、それをその子の障害だ、問題だということ

で見るか、自分の指導力不足だと、子どもが悪いのか、自分が悪いのかと、真面目であればあるほど思ってしまいます。でもあくまでもそれは関係性なので、肩の力を抜いて楽しくということを基本にしながら、自分の対応、我々の対応の不適切さも、楽に、冷静に見つめられる教師集団が必要だと思います。巡回に行くと、ここのあたりをスツとらえている学校もあります。「こういういいところがある、自分はこうしたが、うまくいかなかったから、こうしてみたいと思う」。うまくいかなかったことをスツとらえている学校もあれば「自分が悪い」と思ってみたり、保護者から責められると思った場合、学校は防衛して非はないと思いたいと動いていると修正がきかないということがあると思います。巡回相談の中で、ちょっと専門家づらし、LD、ADHDの子どもたちを25年間かかわってきた私が「今、学習の中で、半分も適切なことができていないと自分は思うんです」という教師に、一杯間違いとかな不適性があるってあたえまりだということ、それをどう修正できるかということを考えます。不適切なことをごり押しして続けるか、あるいは別の場所や個別の作業でなかったら何もできないと、必ずしも思わないということでも考えたいと思います。

ドクターとか保護者が「こういうふうにした方がいいですよ」と言っていたいくともいいと思います。個別の場所ならできるが、集団の場所ではできないということで難しいという側面と同時に、逆に集団があるから、ドクターとか家庭ではできないことが、大変だけど、学校ではできるということ、プラス面で生かしていけたらという形で見ていきたいと思います。加藤先生からも学校に対して、いろいろ問題点をいただき、内山先生もTEACCHを絵カードとスケジュール表ということで子どもを動かす手段としてしまう危険性など、いくつかのポイントを教えていただきました。それらを、今日、会場におられる先生方、教員の方でしっかり押さえて、そして望月先生が言われたように、肩の力を抜いて楽しいことをやりながら「むりなものはむりや、でも何もできないわけじゃない、一杯、不適切なことをしたかも知れないが、子どもに合わせてちょっとでも修正できることがあったら修正していこう」ということで、相互にディスカッションしながら、学校で取り組んでいけたらと思っています。

荒木 次に江川先生から。京都市教育委員会で昨年まで指導主事として高機能自閉症やアスペルガー症候群のプログラムの開発に取り組んでこられた先生です。

江川 私も教師で子どもたちの前に立つと100%できる万能者という感覚になるんですね。しかし100%できる指導者なんていない。専門家と言われるドクターも研究者もそう

だと思っんです。100%できるという自分と、できない自分との間のギャップを、個々の先生や専門家がどう処理できるか。これまで処理できなかったケースが多かったと思います。できないから、それでいいのではない。どうしたらいいかということが、今回の特別支援教育の流れかと思っます。特別支援教育は100%万能な指導を行うことではなく、ある部分についてはうまくできない。できる人が他にいる。その人をどういき、子どもの支援をしていくかということが特別支援教育ではないかと思っます。

現在、呉竹総合養護学校にいます。京都市で養護学校を核として支援システムをつくりました。その一部も担ったわけですが、今、現場にいてその中で、養護学校にある支援センターとサポートチームを配置しています。そこが何をするか。個々の子どもに直接指導したり、支援するのではなく、100%万能でない先生や学校をどうサポートしていくかを、今、やっています。望月先生が専門家が学校に言って云々と。今、ほとんど行っているのは教員です。教員が行って何ができるか。あるセンター担当者が帰ってきて「あそこの問題、先生や」と言っていたことがありました。先生一人が悪いわけではなく、そこに代表された部分があるのだらうと思っます。子どもたちに対してできる状況をつくって、その中で子どもがどう自己実現していくのかと同じように学校の支援体制をどうしていくかということが、今、支援にあたっているスタッフの役割だと思っます。

学校も指導者も、子どもたちがいろいろであるように学校も違っ。指導者も違っ。そこから出発しないと何も改善できないと思っています。望月先生の「脱力系」という話がありましたが、そういう状況をどうつくるか。ある学校でパニックが起こって大変なんです。そういう話の中では学校も担任の先生も渦巻きの中に入って周りが見えない状況にある時、何をしたらいいか。専門家は何をすればいいか。専門家の理論や手法をそのままあてはめても、うまくいくことはほとんどなかったと思っます。その間をどうつなぐかが、我々の仕事です。支援センターのスタッフの仕事になっていると思っます。一人ではできない、一つの学校ではできない。その前提の中でどうしていこうか。これは保護者も同じだと思っます。保護者だけでできない。担任の先生だけでできるわけではない。今日、伺った手法や考え方の基本は何かをとらえ、実際の指導の場所、支援の場所であてはめていくか、個別の教育計画はあるように個別の先生に向けた支援計画はどうあるべきなのかということが、特別支援教育の考え方の中心ではないかと思っています。今日の話を開いてすぐ学校で適用しても、うまくいかない。今日のポイントは何か。自分の

学級の子どもにあてはめた時、どうなのかということを考えてみたいなどと思っています。1日、聞かせていただいて、そういう感想を持ちました。

荒木 それでは続いて両角先生をお願いします。発達相談員として主に乳児期、幼児期の自閉症、アスペルガー症候群の人たちの支援に携わってこられました。立命館大学応用人間科学研究科の特別教授として学生、院生の指導にあたっていただいています。

両角 発達相談員として、保健師さんが1歳半健診で気にかかる子どもたちを見つけた後の二次健診をしております。また和歌山県にある、ひまわり園という児童福祉法に基づく幼児の施設で発達相談員をしております。ひまわり園では、その場の出会いで問診するだけでなく、子どもたちの日々の育ちを見られるという、とてもいい場を与えていただいています。子どもたちがよく育っているという手応えがあります。保育内容、保育方法、チームワーク、保護者への援助、療育など、トータルにどういう環境が子どもの育ちにつながるか。またお母さんたちの支援ができるか。園での様子を、問題行動というより、子どもたちの育ちの手応えを全国発信したいと思ひまして本を出しました。お母さんたちから「全国のお母さんを励ますなら実名で写真を出してもいいですよ」と言っていただきまして、園に対する信頼の熱いことを園長はじめ、とてもうれしく思いました。

発達相談員として、発達心理学の立場から、どういうふうに育てたら豊かに発達するのかということ进行分析しますと、内山先生の言われる環境の構造化ですね。時間的、空間的な環境を含めて。ひまわり園は、その環境の構造化が、今日のお話と一致していると思っています。日本では「母性神話」があって「3歳までは集団保育は馴染まない。母親は家庭に帰れ」と言われ続けてきました。私など「0歳未満児を預けるのは悪だ」と誇られた世代です。私の先輩は無認可から保育運動をしてきました。まだ言葉を獲得していない未分化な乳児から幼児の1歳半くらいの子どもたちの集団保育の環境をどう整えるか。複数担任、保育士の集団から、ずいぶん学んだと思います。

TEACCH を私たちも学びまして、わかりやすく、子どもの立場に立って子どもの視点で見て「この環境はどうか？」ということを皆で考えてきました。生活リズム、昼食と午睡を挟みまして6時間、5日、30時間、お預かりしますと、どんな障害の重いお子さんでも伸びていきます。母乳保育であるとか、保育内容もワクワクするような楽しい活動。園にいても楽しい。毎日、お散歩に行く。乳幼児期は十一先生が言われたように、生理的

に整えること、快の感情、五感を磨く、外に出て知的好奇心を養い、荒木先生の言われたような遊びの段階で、対人関係で「見て、見て」ということが出てくる。共同注視、誰か石を水に投げますと「何や、何や」とヤジウマの子がいて寄っていく。そういう渦に入れない子どもも、園から出ていって土手に登ることもする。社会性では危ない道は手をつないで歩く。地域の人にご挨拶をする。四季折々いろんなことがあります。そういうふうにして快の感情を育てていく。今、寒いので、子どもたちは毛糸の帽子、ジャンパーを着て、手袋をして完全防備で、13人の子どもが保育者4人で探検散歩に行きます。保育園、幼稚園では一対一が必要な子どもだろうと思うんですが、一人にベタッとくっつかず、集団の中で楽しく、ハイハイしている子どももでも、土手によじ登ります。元気な子どもは先に走って行って「何々君」と呼んだら振り返ってくるように、言葉、コミュニケーション、社会性、ありとあらゆることを育てる、まとまりのある活動を保障していく。リズム、絵本、座ってお話を聞くことも、絵本の素読みでは難しかったらピアノをつけてミュージカル風にするとか。子どもたちは言葉はわからなくても音楽はわかりますよね。リズムもわかります。そういうものを媒介にして、どの子どもも楽しめる活動をデイリーに組み込んでいく。

子どもたちは入ってきた時は多動、奇声、パニックなど、情動こだわりがあったものがだんだんなくなってくる。知的なものや言葉を獲得していない子どももいますが、見学に来た人が「どこが障害児？」「軽い子ばかりじゃないの？」というくらい障害児らしさが薄くなっています。そういう育ちが基本になって、Wing. の言う「3つ組の障害」のことを勉強したりしています。高機能自閉症の子どもが入ってきて、急に伸びて知識に優秀になる子どものタイプもありますが、障害の比較的重い子どもたちのことを、今日は申し上げました。

能動的に参加することの重要性、生活をつくってあげる。集団的なかわりとと言っても、お母さんにも、子どもにも、個別に対応することあります。36人、なかなか難しい子どももいますので、OTの加藤先生とか荒木先生のような丁寧な教育、OT、セラピーは必要だと思います。集団での順番、交代とか、お友だちを待つとか、集団しかできないことと、個別でつなぐもの、より集団で楽しめるようにしてあげる、適応ではなく、一緒に社会参加することができるように丁寧に見てあげることも必要だということを、今日のお話を伺って感じました。

荒木 望月先生から3人の方のコメントを踏まえて総括的なまとめをお願いしたいと思います。

望月 先生方に、できないことがある。同時に特別支援教育という文部科学省からの新しいシステムが入ってきて混乱がある中で、先生方ができないということがある。「脱力系」という言葉を言っていますが、二つあると思う。「校長先生が悪いんだからしょうがねえや」ということで、かかわりをやめるのはよくない形。生徒を教えていてうまくいかない時、「生徒の頭が悪いからだ」というのと同じです。できないことの積極的な意味は、できる先生もいて「見習え5という話もあるけど、精一杯やってもできないことがある。それは「これがあればできるのに、だからできないんだ」という「環境設定」を見いだすきっかけになっていることはあると思う。特別支援という新しい流れが出てきて、ある種、混乱もあったり、試行錯誤もされているというのは、ある種の実験をしているとも言えるわけで、単に教え方の実験ではなく、あるべき環境設定、教員の人数の問題から地域の資源の問題とかもあると思いますが、そういうものを有効に、どうつくっていったらいいかという、そういう意味での必要な状況、できないということをきっちり見つめる状況ではないかと思うんですね。我々は今、面白い状況の中にいるので、そのことをワクワクしながら楽しく拾い出して皆で主張しあう、それを実現していくことはできるんじゃないかと思います。

今回、荒木先生に企画していただき、今後も発達と行動分析の分野で連携と融合で仲良くやっていきましょう。会場設定をやっていただいた研究支援センターの石田さんに改めて感謝します。最後まで皆様、おつきあいいただき、ありがとうございました。これで私の最後の言葉にさせていただきます。

荒木 今日のシンポジウムでたくさんの一致点が見いだせたのではないかと思います。最後に総括させていただき、まとめのご挨拶に代えさせていただきます。

午前中、十一先生、青山先生に精神医学の立場、教育の現場の立場でご発言いただきました。十一先生の報告にもありましたように高機能自閉症、アスペルガー症候群と言われる子どもたちの基礎的な理解についてしっかり理解することが前提にあって、現在、医学、心理学、教育学、教育実践が到達している段階を見ていく。そして今、到達している最高のものを子どもたちに直接届けるのではなく、現場の教育の責任において学校の先生たち、保護者の方が子どもたちに取り込んでくださることが大事ではないかと

いうことを、お二人のお話を受けながら感じておりました。

午後の4つの報告の中で、子どもたちに何ができるかという立場から問題を建て直す
と協力しながらできることがずいぶん多いんだと、今日の午後の先生方の話を聞きな
がら感じたことです。高機能システム、アスペルガー症候群の子どもたちはパニック等
もあって、真剣に向き合わないと、しっかり力を出し合わないと、簡単に問題が解決する
わけではない。そう意味では協力しあうことが必須不可欠だと思っています。うまくい
かないから個別にするとか、うまくいかないから特別なやり方だけにしてしまうのではなく、
個別のやり方もやるが、集団も保障する。地域でコミュニティでしっかり生活していける
ような方向を、後ろに下がらないで、前に向かってつくりだしていくことが、立場の違い
を越えて確認できたのではないかと感じております。

先生方の発言の中で「環境の構造化」ということが何度も出てきたと思いますが、人間
にとっての環境を単なる物理的環境というふうにとらえるだけでなく、対人関係もあるで
しょう、歴史や未来を見据えた時間的な環境、1日のデイリープログラムの問題だけでは
なく、新しい教育の歴史をつくる、障害をもつ子どもたちの歴史をつくっていくという視
点も積極的に採り入れながら考えていかなければいけないのではないかと感じた次第です。

このプログラムの中で、20年前にみた子どもたちの現在の様子を家庭訪問して聞き取
り調査を始めているところです。高機能自閉症と呼ばれて現在30歳になっている人た
ちに、好きなこと、嫌いなことを聞いた時、「嫌いなところ、イラク、パレチスチナ、紛争の
あるところに行きたくない」。突拍子もないことを言っているなど言えないわけではありま
せんが、テレビなどを通して社会の変化、社会で起こっていることを感受性豊かに受け
止めているんだと。環境の行動化を考える時、子どもたちが安心して安全に暮らせる
社会をつくっていくためにも、戦争や紛争を含めて、マスコミなどの環境も含めて考えな
いといけないと感じた次第です。

今日1日、盛り沢山でしたが、ぜひまた皆さん、職場等でさらにディスカッションを深め
ただけいたら、と思っています。アンケートに感想をご記入いただき、質問なども
合わせて書いていただきましたら、それを先生方にお渡しし、ご回答できるものはして
いただき、双方向のディスカッションができる仕掛けを考えていきたいと思っておりますので、
よろしくお祈りいたします。それではこれで終了させていただきます。ありがとうございました。